

伝統染織活動を通じた子育て環境の創造 – 幼児教育機関を軸とした市民協働 –

事業代表者 教育学部・准教授・佐々木和也

構 成 員 高根沢町住民生活部環境課・岡本英男, NPO 法人ふるさと未来 SOU・野村恵子

協 力 陽だまり保育園, にじいろ保育園, 桑窪花づくり女性の会, フリースペースひよこの家

1. 事業の目的・意義

エコ・ハウスたかねざわは、高根沢町（環境課管轄）の環境学習の拠点として環境学習・リサイクルショップ・資源ごみ回収機能等を有している。

H23 年度から、指定管理者として NPO 法人ふるさと未来 Sou が企画運営を行っている。

申請者はこれまでエコハウスと連携し、伝統染織を中心とした環境・ESD 学習プログラムを開発し、定期的な学習会（里山文化の会）を通して、地域住民に環境啓発を促してきた。この資産を生かして、2008 年度より、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化する活動を、在宅介護支援センターの農地を利用して展開してきた。この事業を通して、町の不登校児童・生徒の居場所フリースペースひよこの家、地域の保育園と連携体制を築き、家庭内で伝承されてきた和綿文化を地域モデルとして、地域創造に関わることのできる市民の育成に寄与してきた。

自然遊びや体験の低下が著しい現代、子どもの豊かな発達を保障する環境「子育て環境」を市民が協働して創っていく観点は重要である。そこで、地域再生の拠点として注目されている幼児教育機関と地域の社会資本をつなげることで、地域で子どもを見守り、育てるといった伝統的なスタイルを再生させる環境を創り出し、そこでの幼児教育を構築する。そこで、平成 25 年度より 3 年計画で、NPO 法人ふるさと未来 Sou の自主活動グループ「里山文化の会」が町内保育園と連携しながら、地元の里山で藍を栽培し、藍染活動を展開しながら地域交流体制づくりを行い、保育園が果たすべき地域貢献機能を探求する。最終的には、町内の保育園・幼稚園が本事業に共同参画することで、

里山の魅力を伝承するための啓発活動の基盤づくりを目指し、町の子育て環境の創造および環境学習の充実を図っていくことを目標とする。

2. 事業内容

(1) 伝統染織を活用した就学前環境教育開発

里山文化の会が蓄積してきた伝統染織に関する資産を、幼児教育に活用するための環境教育プログラムを保育園と共同で開発する。高根沢町の資産である豊かな自然環境の保存と継承に資するため、とくに生物多様性の視点から「藍」を活用したプログラムを中心に開発し、幼児期の CEPA 活動のあり方を検討する。また、今後もフリースペースひよこの家との連携により、不登校児のメンタルヘルス面における効果についても考察する。

(2) 保育所を拠点とした地域協働モデルの創出

今後の保育所には多様な機能が期待されている。(1)のプログラムの実施を共有化することで、地域の子育て文化を醸成するためのコミュニティ形成を図る。子育て世代はもちろんのこと、地域の市民や関係機関など様々な主体が参画し、協働していくことで地域の子育て環境を創造していく担い手の育成につなげていく。

3. 事業の進捗状況

本年度は、環境課の調整で公立保育園である「にじいろ保育園」が本事業に参画していただいた。しかしながら、年度が始まってからの調整となり、里山での共同作業を展開するには至らなかった。そのため、まずは藍を定着させるために、ベランダでプランター栽培を行うこととした。次に、藍染体験で最も安全かつ容易にできる生葉染を利用して「大きな波をつくろう！」と題して、シルク羽二重（実験用試験白布）10m を染め、酸化作業

のときに園庭で布を広げ、大きな波を起こしながら色の変化を楽しみ、藍染を初体験してもらった。布の下から空を見上げると「水の中にいるみたい～」など、プール体験やメディア体験と結びつけて嬉々としていた様子が印象的であった。作品は後に運動会や生活発表会の劇の中で利用していただき、教材の連続性を確保することができた。



(a) プランター栽培の藍



(b) 酸化作業をしながら布を見上げる

図1 にじいろ保育園での藍の生葉染の様子

初年度の保育園にて本藍染の活動を取り入れるには、藍を活用した保育や染色を取り入れる意味を認識し、それをどのように保育に落とし込むかの検討が必要となる。今年度は、先行保育園である陽だまりの取り組みを伝えつつ、化学建てによる藍染を活動の締め括りとした。タデアイの沈殿藍（里山文化の会が製藍）を炭酸カリウムで pH を調整した水溶液に分散させ、ハイドロサルファイト（工業用漂白剤）で還元して藍染を実施した。

建て作業は予めベランダで行い、ビーカーを利用して教室内で還元する様子を観察し、藍染の色の変化を体験させてから自分で絞ったバンダナを染めてみた。



(a) 建染めにてバンダナを染める



(b) 還元色は緑色

図2 にじいろ保育園での建染めの様子

次に、先行保育園である陽だまり保育園では、昨年度構築した桑窪花づくり女性の会および里山文化の会との協働体制で、藍の栽培から干葉藍づくりを行った。役割分担が認知されていたため、昨年以上にスムーズに作業することができ、子ども達とのコミュニケーションも盛んに行われていたように感じた。今年度は一番刈りは沈殿藍づくり、そして二番刈り作業を協働作業日に設定し、8月の炎天下で収穫、乾燥作業を行った。



(a) 藍栽培を協働で行う里山にて朝の挨拶



(b) 園庭にて干葉藍づくり

図3 陽だまり保育園での干葉藍づくり

今年度は年長組が 19 名と多かったため、協働作業も散漫になることが予測できた。そこで、並行して藍の生葉を使った叩き染めを行った。幼児教育では、木槌の力加減など調整力が要求されることから、個人差が大きく、とくに木槌と藍葉の衝突角度の調整が難しいようであった。叩き染めや摺り染めは、浸染技法が確立する前から行われていた原始的な方法であり、幼児期後期から学童前期にかけて取り入れたい要素を多く含む。しかしながら、任田[1]は理科教育教材としての藍の生葉叩き染めについて考察し、理科教材としての魅力を含むが、学校現場ではほとんど普及していないと述べている。その原因として、藍の生葉の入手困難さ、指導教員の経験不足、そして実施時の騒音と怪我の問題を上げている。とくに小学校低学年での木槌あるいは金槌での怪我を懸念しているが、本研究では幼児期後期に適切に取り入れることが「生きる力」の素地を養うことにつながると考えている。



(a) 配置を決めて叩いていく



(b) 1 時間ほど天日干し



(c) アルカリ石鹼で洗っていく

図4 陽だまり保育園での叩き染め

図4(a)では、自らデザインを考えて葉を並べ、食品用ラップで覆って、叩いている間に葉がずれないように援助する。写真は園児であるが、年長同士であっても十分に作業できていた。ラップで固定が難しいようであれば、アクリルファイルなどを利用することも検討してもらいたい。しばらく天日で乾かし、最後にアルカリ石鹼で葉緑素(クロロフィル)を除去し、インジゴの前駆体であるインドキシルがアルカリでインジゴの生成を促進

させ、綿でも比較的青くし上がる。

今回は、外での作業としたため木槌による騒音は避けられたが、にじいろ保育園では室内作業であったため相当の騒音環境になってしまった。さらに、大きな音に対処できない発達障害をもつ園児もいたため、作業中は別の場所で待避してもらった実践となった。



(a) 女性会の藍甕で仕上げ染めをしている



(b) 染色を終えて園のベランダで天日干し

図5 地域と連携しての藍染Tシャツづくり

今年度の連携事業の中で特筆すべきこととして、夏の藍染Tシャツづくりにて染色作業を協働で行ったことであった。陽だまり保育園の年長児が今年度は19名と多く、藍建も二甕で行った。しか

しながら、保育行事との関係で希望する藍色にまで仕上げるには日数が足りなかった。そこで、桑窪花づくり女性会の藍甕を借りて、仕上げの染色を行うこととした。会長ご夫妻自ら染め上げていただいで仕上がった(図5)。

そして、陽だまり保育園では「暮らしを創る」ということを保育のテーマとして春に始まり、まず最初にふるさと未来SOUとの連携で、間伐材を用いた箸づくりに挑戦してみた。これまで小学生までしか実績がなかったが、園から歩いていける地の利も生かしてマイ箸が園での日常生活に加わった。そして、恒例となっている益子でのお茶碗とお皿づくりを経て、6月以降の食卓は個性溢れる生活道具で彩られた。また、19名の人数で名がテーブルを使用すると距離が遠くなってしまうため、円卓を使って親密感が演出された。



図6 円卓を使った昼食風景

このような生活環境で日々を暮らし、そこで仲間意識が醸成され、自分の課題を集団の中で乗り越えて一人ひとりが輝く保育を保障していく。本来の地域社会や家庭の中で当たり前だった環境を保育の中心に据え、その効果を向上させていく一つ的手段として藍染活動があることが理想的であると、今年度の取り組みを振り返って総括できる。その締め括りとして卒園製作として、箸袋を作ることとした。

図7(a)(b)は、共同作業で箸袋に仕立てる布を染めている様子である。三角形に裁つ前に絞りを入れ、ペアになって1年間の経験を生かして自ら染

めて行く作業を取り入れた。こうすることで、19名の染色時間を短縮することができ、一緒に卒園していく仲間を藍染という行為を通して意識することができる。今年度は、(a)の園児が発達障害を抱えていて、写真の保育士が3年間支援を行ってきた。藍染活動前半では、藍で手が汚れる、においが嫌などで一緒に活動できなかった。しかし、藍色が年長組の象徴であることは認識していたし、一緒に染めたいという大人側の意思を伝えると応えてくれるようになっていた。そして、担任保育士が箸袋を染める前の鉢巻き(写真 b)の布を染めるときに、彼の願いを読み取ることができた。それは、藍甕から上げた布の灰汁を流すために用意していた樽の水が汚れているので、青くなる瞬間が見えないのが嫌だという思いであった。それ以降、彼が染色している間に水を替えることにより、意欲的に藍染に取り組むことができるようになり、(a)のときには笑顔で楽しげに染めていた。

そして、(d)のような箸袋に仕立てた。内布には会津木綿を用いて、保育園を巣立った先輩達が行っている東北支援につながるよう、東北を忘れないという大人が伝えたい思いを渡すこととした。

4. 事業の成果

本年度は、公立保育園の参加により藍の活動を広げることができた。年度末の調整により、来年度も出来る限り参加していきたいとの回答を得ている。しかしながら、役場担当者ならびに園長共に異動が決まったとの報告を受けているため、春先の引継を丁寧に行って欲しい旨を依頼しているところである。

地域の社会資本と幼児教育機関を結びつけるという意味では、藍染作業を共有化して、園だけで完結させるのではなく、連携団体と一緒に染め上げて行く活動や、里山での協働作業を通して地域の自然環境の豊かさを生かすことで、着実に進展していると感じる。ここに子育て世代をいかに巻き込んで行くかが今後の課題である。

また、今年度の藍染活動を保育のテーマであっ



(a) 大好きな保育士と最後の藍染



(b) 仲間と力を合わせて最後の藍染



(c) 創ってきた暮らしを卒園式にて再現



(d) 箸づくりに始まり箸袋に終わる

図7 暮らしを創るをテーマにした藍染活動

た「暮らしを創る」観点でみたとき、幼児期の環境教育で大切にしたい生活環境を俯瞰することに繋がるのではないかと考える。家庭や地域の中の生活文化が著しく低下している現在、子どもの育ちに暮らしがないと言われる。このような現状で、環境との関わりを認識し、その環境を持続的にするという環境教育の目標を達成するには、まず衣食住を基本とした生活要素を丁寧に再現していくことが不可欠ではないだろうか。木（箸、円卓）や土（食器）、そして布（箸袋）、染料（藍）などが保育の中で繋がって、はじめて生活が具現化され、そこに仲間（本来的に家族）と一緒に文化を形成して暮らしが成り立って行く。このようなプロセスそのものを保育の中心に据え、丁寧に子ども達の願いに寄り添って行く。その寄り添いを増幅させる藍染活動をプログラムしていく必要があると今年度は実感した。

5. 今後の展望

来年度は計画の最終年度となる。地域連携体制として行政と地域 NPO が協働体制で幼児教育環境（子育て環境）を支援していけるよう基盤をしっかりと創って行きたい。また、藍染活動については人材育成も含めて検討し、何らかの形で町内の保育園に藍を普及できないかを探る。この一環として、地元の保育士を対象とした講座を開催する方向で調整に入っている。さらに、今年度発足した高根沢町志民活動センター「たんたん Café」との連携も視野に入れ、次につながる準備をしていきたい。

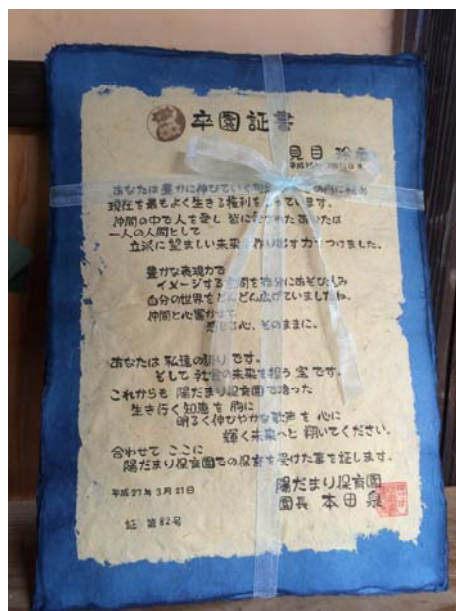
参考文献

- [1] 任田康夫, 「藍の生葉染め」で染め出すことが出来る様々な色とその原因, <http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~cse/zentai07.pdf> (2015年3月25日筆者確認)
- [2] 佐々木和也, 神山晃一ほか, 生物多様性の視点を取り入れた藍染活動, 天然の色(天然染料顔料会議報告 2013), pp.4-11, 2014

- [3] 阿部治著: こどもと環境教育, 東海大学出版会, 1993
- [4] 山崎和樹: 藍染の絵本, 農文協, 2008
- [5] 北澤勇二: 染太郎の口伝帳 免許皆伝の巻, クラフトゆう, 2009



暮らしを創ってきた生活道具



手作りの藁半紙の卒園証書